

(「新建築」1964 6月号)

前衛建築家の宙返り 山口文象

関東の大震災から昭和2・3年頃までは、建築界もまだ明るい華やかな時代であったように思います。しかし、そろそろ薄暗い政治的圧迫が、雨の前のしめった空気のように頬をうす気味悪く撫ではじめたようです。間もなく5・15事件、軍部・特高の高潮から満州・上海事変・そして太平洋戦争ということになります。

朝日新開東京本社が竣工しましたのが昭和2年ですから、この頃はまだ新興建築家ものんきにメンデルゾーン、ペルチヒ、コルビシエを輸入しておればよかったので、まあ幸せなよき時代とでもいえましょうか。建築はかりでなく他の美術のジャソルでもアングル・アルキペンコ・マリネッチ、カンディンスキー、ブランクージーなどの導入でお祭り騒ぎをやっておりました。

村山知義のマボーから“三科”さらに“単位三科”とダダイズム、未来派から立体派、構成派そしてシュウルリアリズムへと、ほんとうに忙しい応接にあけくれておりました。建築と人間と社会を考えたり・絵の・演劇の本性をとことんまで突込んで思索している暇などあったものではありません。あらゆる文化そのものが藻のように表面に浮きあがって根が底についていませんでしたので、どす黒いファシズムがにじり寄って来るのに少しも気がつきませんでした。

じっくり考えること・自分の仕事の本質を探究するには、水中眼鏡で餌を探すような態度が必要だったはずで、日本の建築家も芸術家も思想には非常に弱かったようで、悪い意味でのアルチザンでありました。

このことは、大正の白樺派のヒューマニズムからずっと逆のぼって、明治文化全体がそうであったともいえましょう。歴史的にみて文化移入の姿勢は伝統的に祖先からあまり変っていないようです。このようなことがよいのか、どうかは別として、その徹底的な思考不足はおおえません。彼らの作品を芦の如くゆれ動かし続け、しっかりした自律性などまったくありません。

だから“進歩的”な建築家の集りの新興建築家連盟も“赤”だという佐野利器という先生の鶴の一声でなんの仕事もせず、ばらばらに散ってしまいました。分離派はこの頃はもう活動を停止しております。ようやく華やかだった前衛建築にも終りの幕が降りようとし、今度はフ

ァシズムのベルトに乗って伝統主義やヤマトイズムが、あらたに舞台へ登場する準備をはじめます。

前衛建築家は、お題目のように歌舞伎座や軍人会館の伝統主義を攻撃しておりましたが、日本軍の勢力が南へ強大に広がるにつれて、なんの抵抗もなく友邦に建つ文化会館のデザインは平安調や桃山様式にスイッチされてしまいました。

そしてまたその頃、みそぎ派の人々が主催したダヴィンチ展というのが上野の不忍池畔で催されましたが、これはなんでも、ダヴィンチも東洋的発想や影響によって、彼の偉大な仕事ができ、というテーマであったように想い込まれます。ドイツのユウバーアルレスに似せた汎日本主義の思潮はすっかり前衛芸術家を水びたしにしています。

戦後はどうだったでしょうか。思想犯は解放されてGHQの前で万歳を三唱し、民主主義が上棟式の餅のように投げ与えられました。

前衛建築家も急いで姿勢を換えなければなりません。人民のための住宅、人民のための建築、そして人民のために……。

このかけ声も、代用食やお粥期を過ぎ、銀めしがあまねくゆき渡る頃になると、人民はいつの間にか不在となります。近代架構となにかそれを想わせるパターンとの結婚によって「伝統」を主張する新日本近代建築がつくられはじめました。

「人民」はどんな住居でもよいと、地に伏して哀願しているのに、建つものは世界的水準の近代建築という県庁舎、市庁舎や村役場です。

前衛生花などという化物は別として、前衛を冠する建築、音楽、絵画とは一体どんなものなのでしょうか。またどこへ向っての前衛で、だれのための前衛なのでしょう。建築は人間のためにどんなあり方が本当なのでしょう。

私たちは、この頃のかつてない平和の穏やかな日ざしの下で、もう一度じっくりとこの問題を考えて見ようではありませんかこの40年間に、前衛建築家は二度ばかり宙返りをしました。もうやらないとだれが保証するでしょう。今度こそ背骨にがっちり筋金を通して、ゆらゆらしない前衛でありたいと思います。この願いはもちろん私をも含めた40年の反省にほかありません。

(「新建築」1964 6月号)